

JA 全農ちば 営農情報集

2024年
9月



今月の情報

1. 水稲 水田多年生雑草防除、ジャンボタニシ対策、土づくりについて
2. 園芸野菜 病害虫防除情報
3. 安全な農作物生産の取り組みについて

今月の気象（気象庁 8/31 発表 1か月予報より）

8月に引き続き気温が高くなる予報です。施設栽培の高温対策にも気を配りましょう。

また、8月下旬から台風や大雨が続いているため露地畑の水管理や、雨上がり後の病害虫対策にも気を付けましょう。



注意とお願い

農薬登録内容は掲載時点の情報です。農薬を使用する際に必ず最新の登録内容をご確認ください。

水田多年生雑草防除、ジャンボタニシ対策、 土づくりについて

～次作に向けて秋から出来ること～

JA全農ちば 営農支援部

1. はじめに

8月30日に農林水産省より公表された作柄概況（8月15日現在）によると、「良」が1県（青森）、「やや良い」が11道府県（東北+栃木、茨城他）、「平年並み」31都府県（千葉含まれる）、「やや不良」が3県となり、5月以降、総じて天候に恵まれた一方で、地域によって田植え後の日照不足などの影響があると見込まれています。

2. 難防除多年生雑草を秋のうちに防除しましょう(秋防除)

多年生雑草の多くは地上部が枯死しても地下の塊茎が残り、次年度以降の発生源となります。

クログワイやオモダカは稲刈りが終わると地上部が再生してくるので、秋期防除を行い塊茎を枯らして発生源を減らしましょう。



○秋防除のポイント

- (1) イネの刈取り高さをやや高くする(20cmを目安)。
- (2) 根まで枯らすタイプの除草剤（ラウンドアップマックスロード50倍液等）を再生した雑草の地上部にしっかりかかるように散布する。
- (3) 除草剤散布後2週間程度は耕うんを行わない。
- (4) 霜が降る前（10月末）までに散布する。

写真 刈取り後に再生してきたオモダカ

3. スクミリングガイ(ジャンボタニシ)の防除は地域で実施！

薬剤防除だけでなく、刈取り後の耕うん等による耕種的防除も重要です。

さらに、ジャンボタニシは地域の水路を通じて移動するため、一部水田だけの対策では防除に限界があります。被害を減らすためには地域全体でジャンボタニシの数を減らす必要があります。

地域全体で水田内の防除をしっかり行う、地域全体で冬季の水路掃除に取り組むなど、地域で連携、対策を行うことが個体数を減らすために非常に重要です。

次作へ向けてしっかりと対策をはかりましょう。

(1) 刈取り後のスクミリンゴガイ対策

ア. 石灰窒素の施用

水温 15℃以上の時期に 3～4 cm 湛水し、数日放置しジャンボタニシを水中に出させる。石灰窒素をむらなく 20～30 kg/10 a 散布し、3～4 日湛水のまま放置する。

(※魚毒性があるので、落水・かけ流しは避けます。また、次作の施肥量にも注意しましょう。)

イ. 稲わらすき込み時のポイント

ロータリーの回転速度上げ、トラクターの速度を遅くして丁寧に耕うんして土中に、潜っている貝を砕きましょう。田面が乾き、固まっている時に行うのが効果的です。

4. 良質な米は秋の土づくりから！

高品質のおいしいお米の生産は土づくりから始まります。土の養分供給力、急激な環境変化に対する抵抗力、作物の根の活力を高めることで、高品質で良食味米の安定生産につながります。

(1) 土づくりの方法

ア. 稲わらのすき込み(秋耕)

稲わらにはケイ酸をなどの生育に必要な多くの養分を含んでいます。稲わらをすき込むことで土壌養分と有機物供給を同時に行うことができます。しかし、すき込み時期が遅くなると、稲わらの分解不足が生じて次のような影響を及ぼします。

(ア) 田植後、酸素不足(還元状態)により、根腐れをおこす。

(イ) 微生物が土壌中の窒素を先取りし、初期生育が悪くなる。

田植え前までに分解が進むよう、刈取り後、秋の早い時期にすき込みましょう。腐熟促進には 5～10 cm の浅耕とし、必要に応じて腐熟促進剤を施用しましょう。また、**温室効果ガスの発生抑制にも秋耕が有効**です。

イ. 有機物を施用する

堆肥などの有機物の施用により、土の物理性の改善、地力の維持向上、土壌微生物の増殖促進に繋がります。また、堆肥には鉄やマンガンなどの微量元素や水田で不足しやすいリン酸、加里が含まれているので土壌の化学性の改善が図れます。

堆肥の施用量は牛ふん堆肥で 10a あたり 1 t 程度の施用が一般的です(堆肥の種類により異なります)。ただし、家畜糞尿の堆肥は肥料成分が多く含まれているので、化成肥料で施す基肥量は堆肥の成分を考慮した量としましょう。

ウ. 深耕を実施する

一般的に耕うん作業はロータリーが一般的です。砕土・整地が同時に行え、作業性が良い一方で浅耕になりやすくなるため、年々作土が浅くなり耕盤が硬くなる傾向が見られます。作土が浅いと①根が伸びにくい、②倒伏しやすい、③養分過多になりやすいなどの生産力の阻害要因となります。

対策として、根の分布範囲を広げるため、プラウ耕による深耕やトラクターの速度を遅くしのロータリー耕により深さ 15 cm 程度を目安に作土の拡大を図りましょう。

(2) 千葉県の水田土壌の養分状態について

水田土壌中のケイ酸と加里は、かんがい水のパイプライン化による自然供給量の減少やWCS（ホールクroppサイレージ）の普及、L型肥料・一発型肥料による長年の作付けで徐々に不足してきています。

ケイ酸と加里は玄米品質に重要な養分です。積極的に土づくり肥料の施用しましょう。

ア. ケイ酸の現状

土壌中ケイ酸の目標下限値は 15 kg/10 a（全農の土壌診断基準値）です。昨年度に診断した圃場(1075 点)のうち、約 3 割の圃場でケイ酸含量が不足していました。(表 1) 特に、ケイ酸含量の不足はC E C (保肥力)の小さい砂質土壌で顕著となっています。(図 1)

表 1. 2023 年 地区別ケイ酸含量分布 (点)

地区名	14 以下	15-20	20-25	26 以上	総計
安房・君津・木更津	14	25	28	81	148
いすみ・長生・山武	43	31	36	38	148
印旛、市原、千葉	9	21	29	73	132
東葛	4	21	23	25	73
香取・海匝	241	155	124	54	574
	311	253	240	271	1075

※塗りつぶし部分(青)…ケイ酸含量が基準値以下 (15 kg/10a) の圃場

塗りつぶし部分(緑)…ケイ酸含量が少なめの圃場 (ケイ酸不足予備軍)

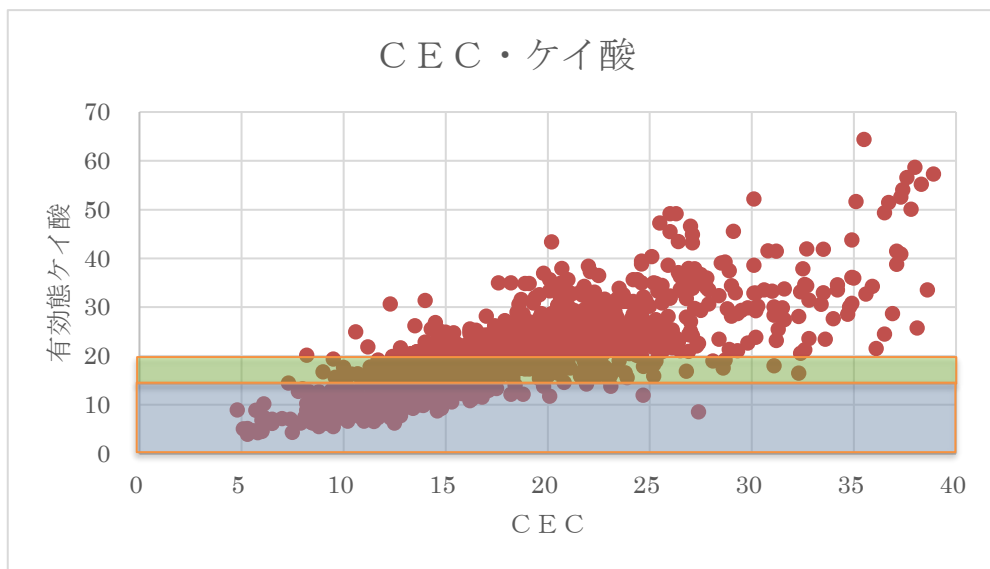


図 1. ケイ酸含量散布図(2023)

塗りつぶし範囲(青)…ケイ酸含量 15 kg/10a 未満

塗りつぶし範囲(緑)…ケイ酸含量 15 kg/10a 以上 20 kg/10a 未満

イ. 加里の現状

加里は、約7割の圃場が不足または不足予備軍であることが明らかになりました。
 (表2) 加里は土性にかかわらず不足傾向です。(図2)

表2. 2023年地区別加里含量分布 (点)

地区名	9以下	10-30	31-50	51以上	総計
安房・君津・木更津	5	55	58	30	148
いすみ・長生・山武	0	106	35	7	148
印旛、市原、千葉	5	82	39	6	132
東葛	0	32	35	6	73
香取・海匠	36	416	109	13	574
	46	691	276	62	1075

※塗りつぶし部分(青)…加里含量が基準値未満(10 kg/10a、CEC=20の場合)
 塗りつぶし部分(緑)…加里含量が少なめの圃場(加里不足予備軍)

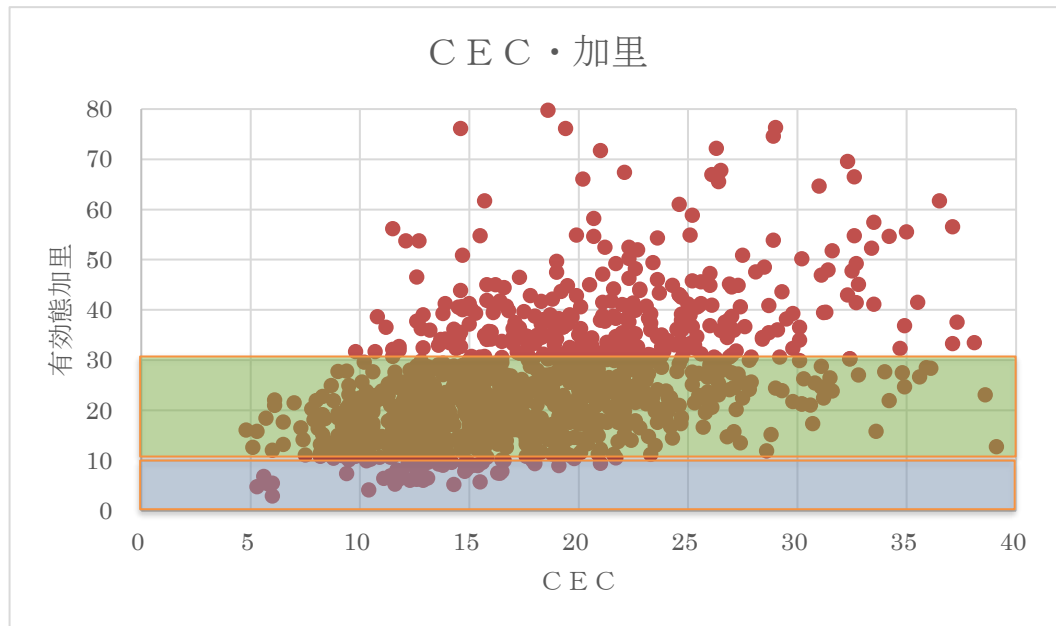


図2. 加里含量散布図(2023)

塗りつぶし範囲(青)…加里含量 10 kg/10a 未満
 塗りつぶし範囲(緑)…加里含量 10 kg/10a 以上 30 kg/10a 未満

ウ. ケイ酸、加里の施用による品質向上効果

ケイ酸の施用により茎葉が硬くなり、病害への抵抗性が強くなるとともに倒伏軽減対策となる他、受光態勢が改善されて登熟が向上し、さらに登熟期以降の稲株の温度を下げる効果(クーラー効果)によって、白未熟粒の発生抑制が期待できます。

加里は根張りを良くし、根の活性を維持するとともに、光合成産物により生成されたでんぷんを靱に行きわたらせ、白未熟粒発生の軽減や粒の肥大に役立ちます。

エ. 土づくり肥料による土壌化学性の改善

土づくり肥料は土壌の化学性や物理性を改善し、植物が生育しやすい土壌を作る資材です。例えば、石灰窒素の施用は稲わらを分解する土壌微生物の働きを助け、腐熟を促進させます。

土づくり肥料には用途目的に応じた多様な資材があるので、目的に合った資材を使いましょう。なお、以下のような水田圃場ではりん酸・加里の土壌含量が少ないことが予想されます。

- (ア). 倒伏を回避するため、基肥及び穂肥の使用量を控えた圃場
- (イ). 一発肥料のみの施用で穂肥分の加里が不足している圃場
- (ウ). 稲わらを水田から持ち出し、堆肥を施用しなかった圃場
- (エ). L型（窒素成分が高く、りん酸成分加里成分が低い）肥料を使用している圃場

表3 秋に使用する土づくり肥料の特徴と使用方法

目的	肥料名	施用量(10a)	特徴
稲わらの腐熟促進	石灰窒素 (窒素 20%)	10～20 kg	有機物を腐熟する微生物の増殖に必要な窒素と、分解する働きを良くする石灰が含まれているので効果的。
	アグリ革命アクア	100ml	酵素により、稲ワラの腐熟化を促進。液剤はオモダカ・クログワイなど難防除雑草対策の秋防除除草剤と混用可。
	アグリ革命	2kg	
ケイ酸の補給	農カアップ (ケイ酸 20%)	3～5袋	従来のけい酸質資材と比較して利用効率が良いため、2～3分の1で効果を発揮。
	ケイカル (ケイ酸 30%)	5～10袋	水には溶けず、水稻の根からでる有機酸に溶けて吸収されるので秋施用が効果的。稲体の抵抗力アップに貢献。
りん酸の補給	苦土重焼りん (りん酸 35%・ケイ酸 9.4%)	2袋	火山灰土壌や基盤整備圃場等には、く溶性りん酸を含んだ苦土重焼りんが効果的。

園芸野菜 病虫害防除情報

J A全農ちば
営農支援部

1. はじめに

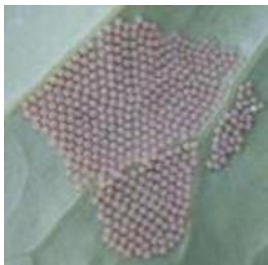
今夏は気温が非常に高い状況が続いております。引き続き害虫の多発には十分注意しましょう。また、9月は台風が発生、接近が増加する時期です。気象予報に留意し、病虫害防除とともに、施設等の保護など事前対策を心がけましょう。

2. キャベツ(チョウ目害虫)

9～10月にかけてヨトウムシ・ハスモンヨトウ・オオタバコガ・ウリバ類などが定植直後の株に被害を及ぼし、特に生長点が食害されると欠株を招きます。10月以降はコナガの発生も増え、外葉の食害も増えてきます。そのため、9～10月は重要な防除時期です。定植後からの早期防除を徹底しましょう。

(1) ヨトウムシ類

ヨトウムシ、ハスモンヨトウは卵を1か所に200~300個の卵塊で産み付けます。孵化後、幼虫は周囲へ分散し、成長するにつれて食害の量を増やしていきます。そのため、防除が遅れると被害を抑えることが困難です。夏が高温少雨の年は発生が多くなりますので、早期防除を徹底しましょう。



ヨトウムシ卵塊



ハスモンヨトウ卵塊



孵化直後のヨトウムシ



ハスモンヨトウ若齢～終齢幼虫

(2) オオタバコガ

オオタバコガはヨトウムシと異なり、一卵ずつ点々と産卵するため、初期被害も点々としていきます。中齢幼虫以降になると結球内部に潜り込むため、被害は極めて大きくなります。

(3) コナガ

幼虫は葉肉だけを食害し、葉の表皮を残すため葉が透けて見えます。多発すると畑全体が白く見えるようになります。薬剤への抵抗性の発達が非常に速い害虫で、千葉県内ではジアミド系薬剤（IRACコード:28 フェニックスやプレバソンなど）の効果が低下しています。地域のジアミド系薬剤の効果に注意し、同じ系統の薬剤の連用、多用は避けましょう。



コナガの食害の様子

<チョウ目害虫防除のポイント>

ア. 若齢期（体長 1cm までが目安）までに防除

同じ幼虫でも成長した後では薬剤の効果を十分に期待できませんので、発生前～発生初期の防除を心がけましょう。

イ. 薬剤のローテーション散布

同じ系統（IRACコード）の薬剤を連用、多用しないようにしましょう。

ウ. 葉裏まで薬剤がかかるようにたっぷり散布

幼虫は葉裏や結球内部に潜るため、丁寧に散布しなければ薬剤が行き届きません。特に、浸透移行性の無い薬剤は注意が必要です。散布液量を多めにするなども効果的です。

○キャベツ チョウ目害虫防除薬剤

対象害虫	IRACコード	薬剤名	希釈倍数※	使用時期	使用回数
ハスモン・ヨトウムシ・コガ	6	アフーム乳剤	1000倍	収穫前日	3回以内
	5	ディアナSC	2500倍	収穫前日	2回以内
ハスモンヨトウ・ ヨトウムシ・ 材外コガ・ コガ	28	プレバソフフロアブル5	2000倍	収穫前日	3回以内
		ベネビアOD	2000倍	収穫前日	3回以内
	30	グレーシア乳剤	2000倍	収穫7日前	2回以内
		ブロフレアSC	2000倍	収穫前日	3回以内
	UN	プレオフロアブル	1000倍	収穫7日前	2回以内
15	カスケード乳剤	2000倍	収穫7日前	2回以内	
コガ・アブラムシ	11A	ゼンターリ顆粒水和剤	1000倍	収穫前日	—
	23	モベントフロアブル	2000倍	収穫7日前	3回以内

※登録のうち最大量・濃度を示しています

3. ネギ(アザミウマ・ハモグリバエ)

(1) ネギアザミウマ

食害された痕は写真のようにかすり状に色が抜けて白くなります。卵から成虫までの生育期間は適温下で2週間程度と非常に速く、薬剤の抵抗性も発達しやすい害虫です。そのため、集中的・定期的かつローテーション散布による防除が必要になります。梅雨が短く、高温乾燥な夏となった本年は、すでに県内一部地域でアザミウマの多発が見られています。引き続き注意しましょう。



ネギアザミウマ成虫



ネギアザミウマの食害痕

(2)ネギハモグリバエ

～新系統に注意！～

葉の内部に産卵され孵化した幼虫が葉肉を食害し、写真のような白い線状の食害痕を残します。4月ごろから発生し、年に5～6世代を繰り返します。被害は5月と8～9月に多く、暖冬や空梅雨・夏期の高湿少雨は多発の要因となりますので、本年は特に注意が必要です。白斑が増加したら直ちに防除を実施しましょう。



<新系統（B系統）ハモグリバエについて>

近年では、従来のネギハモグリバエの遺伝子型（A系統）と異なる遺伝子型である別系統（B系統）の発生が確認されています。B系統は、従来系統と比較して**葉に著しい食害痕**が見られるほか、近接した食害痕どうしが重なり**葉が白化**したようになるといった被害が見られます。激発すると、圃場全体が白く見えるようになります。一見すると、高温によるしおれや、白色疫病などの病害に類似していますのでご注意ください。両系統を形態で識別するのは困難ですが、現時点で系統間の薬剤感受性（農薬の効き方）の差は明確になっていません。本虫の発生が見られたら、系統に関わらず薬剤防除を実施しましょう。



○ネギ アザミウマ類・ハモグリバエ類防除薬剤

対象害虫 ※1	IRACコード	薬剤名	希釈倍数 ※2	使用時期	使用回数
アザミ類 ・ハモグリ類	6	アフーム乳剤	1000倍	収穫7日前	3回以内
	28	ベネビアOD	2000倍	収穫前日	3回以内
アザミ類 ・ネギハモ	30	グレーシア乳剤	2000倍	収穫7日前	2回以内
	5	ディアナSC	2500倍	収穫前日	2回以内
ネギアザ ・ネギハモ	21A	ハチハチ乳剤	1000倍	収穫7日前	2回以内
	4A	ベストガード水溶剤	1000倍	収穫前日	3回以内
	14	リーフガード顆粒水和剤	1500倍	収穫7日前	2回以内
	15	カスケード乳剤	4000倍	収穫14日前	3回以内

※1 アザミ類：アザミウマ類、ネギアザ：ネギアザミウマ、ハモグリ類：ハモグリバエ類、ネギハモ：ネギハモグリバエ ※2 登録のうち最大量・濃度を示しています

☆ネギは農薬が付着しにくい作物です。展着剤（グラミンS、スカッシュ、ニーズ、ドライバーなど）を加用しましょう。

4. イチゴ

9月となり、イチゴの定植時期が近付いてきました。本圃への病虫害の持ち込みを防止するためにも早めの防除を心がけましょう。また、チーバベリーは特に定植時の苗の状態が本圃での果実のつき方に大きく影響します。定植の際は、出来るだけクラウン径が9mm以上の充実した苗を用い、花芽分化を確認した後で定植しましょう。

(1) 萎黄病

萎黄病は、フザリウム菌による土壌伝染性の病害で、一度発生すると数年間残ります。被害株は根も含めて抜き取り、枯れるまで置いてから処分しましょう。発生後の防除は困難ですので、前年発生圃は必ず土壌消毒を実施しましょう。また、消毒後に別圃場の未消毒土が混入しないように注意しましょう。



症状：小葉のうち1～2小葉が黄化し奇形化

○萎黄病 防除薬剤（土壌消毒剤は被覆必須）

- ・クロールピクリン (2～3ml/1穴)
- ・ソイリン (DD+クロピク) (20～30L/10a) 作付の10～15日前まで
- ・バスアミド (ガスタード) 微粒剤 (20～30kg/10a) 仮植又は定植21日前まで
- ・ベンレート水和剤

①育苗期	500倍	50～100ml/株	灌注	3回以内※
②仮植前	500倍	1～3時間苗根部浸漬		1回※
③本圃定植後、収穫30日前まで	500倍	100ml/株	灌注	1回※

(※ベンレートは育苗期～本圃定植後まで3通りの使用方法がありますが、成分総使用回数は合わせて9回以内です)

(2) 炭疽病

ランナーや葉柄の病斑に形成された胞子が雨や灌水の飛沫とともに飛散し、托葉の部分からクラウン部に被害が発生します。そのため、ランナーや葉柄の発病を防ぐことが重要です。頭上灌水は発病を助長するので、低水圧の散水チューブや底面吸水マット等を使用しましょう。また、窒素過多や過繁茂は発病を助長しますので栽培管理にも注意しましょう。



症状：葉ではくさび型の病斑、ランナーでは黒色の病斑、クラウン部は内部に向かい腐敗症状

○炭疽病 防除薬剤（苗床）

FRACコード	薬剤名	希釈倍数 ※2	使用時期	使用回数	備考
7	ベルコートフロアブル※	1000倍 2000倍	育苗期 収穫前日	5回以内 5回以内	予防
3	アントラコール顆粒水和剤	500倍	仮植栽培期	6回以内	予防
4	オーソサイド水和剤 80	800倍	収穫開始 14 日前	5回以内	予防
1 2	セイビアーフロアブル 20	1000倍	収穫前日	3回以内	予防
1 0 + 1	ゲッター水和剤	1000倍	収穫開始 21 日前	3回以内	予防・治療

※1 ベルクートは成分使用回数 10 回以内。育苗期 5 回以内、本圃 5 回以内

※2 登録のうち最大量・濃度を示しています

萎黄病、炭疽病は病徴が見られてからの防除は極めて困難な病害です。前年発生した圃場については必ず土壤消毒を実施し、栽培期間中も予防剤を定期的に使用して防除に取り組みましょう。**発病株は速やかに抜き取り**、圃場から離れた場所で処分しましょう。また、これまで基幹剤であったQ o I 剤（アミスターなど）は、炭疽病に県内で耐性菌が確認されております。治療剤が少ないため、発生しないよう**予防剤主体で薬剤散布**を行いましょう。

(3) ハダニ

ハウスにおけるハダニ増殖の一番の原因は、株に付着したハダニ（持ち込み）のため、定植前に集中して防除しましょう。また、ハウス内の除草も実施しましょう。薬剤散布を行う際は、かけムラが発生しないよう丁寧に散布しましょう。

○ハダニ類 防除薬剤

IRACコード	薬剤名	希釈倍数	使用時期	使用回数
6	アフーム乳剤	2000倍	収穫前日	2回以内
	アグリメック	500~1000倍	育苗期	2回以内
23	モベントフロアブル（灌注）	500倍・50ml/株	育苗期後半 ~定植当日	1回
33	ダニオーテフロアブル	2000倍	収穫前日	2回以内
—	ピタイチ※	500倍	収穫前日	—

(※ピタイチは気門封鎖剤になります。よりかけムラがないよう注意してください。)

<モベントフロアブル灌注のポイント>

- ・下葉かきは丁寧にいき、灌注時に邪魔にならないよう準備しましょう
- ・薬剤を十分に吸収させるため、灌注前後の灌水は控えましょう（薬液が吸収されずに流れ出てしまうことを防ぐため）
- ・弱めの水圧でゆっくり葉の上から丁寧に灌注しましょう
- ・苗はコンテナ等に隙間なく並べ薬剤の流亡を防ぎましょう

(4) コガネムシ類(ドウガネブイブイ)

成虫は葉を、幼虫は根を食害します。一般には、成虫よりも幼虫による被害が大きく、幼根を食害して生育不良、枯死など大きな被害を招くことがあります。成虫発生期から幼虫発生期までの7～9月が防除の適期です。圃場周辺に成虫の好む樹木が多いと多発するため、周辺樹木の成虫も防除しましょう。

○コガネムシ類 防除薬剤

IRACコード	薬剤名	使用量	使用方法	使用時期	使用回数
1B	ダイアジノン粒剤5	4～6kg/10a	土壌混和	定植時 (本圃)	1回
4A	モスピラン粒剤	1g/株	植穴土壌混和	定植時	1回

※登録のうち最大量・濃度を示しています

(5) アブラムシ

成虫、幼虫が葉裏や葉柄に群棲して吸汁加害します。新葉に寄生すると葉を巻いて萎縮させます。圃場周辺雑草からの有翅虫の飛び込みや、苗での持ち込みが主な発生要因です。圃場周辺の除草を行いましょう。

○アブラムシ類 防除薬剤

IRACコード	薬剤名	希釈倍数※	使用時期	使用回数
28	ベリマークSC (灌注)	1000倍・ 50ml/株	育苗期後半 ～定植当日	1回
29	ウララDF	2000倍	収穫前日	2回以内
4A	モスピラン顆粒水溶剤	2000倍	収穫前日	2回以内
4C	トランスフォームフロアブル	2000倍	収穫前日	3回以内

※登録のうち最大量・濃度を示しています

安全な農作物生産の取り組みについて

～農薬散布記録簿は正しく記入しましょう～

J A全農ちば 営農支援部

1. 残留農薬基準値超過事案について

残留農薬基準値超過事案は、千葉県でも毎年発生しており、回収事例も出ています。これは産地の信頼を損ねるものであり、徹底した対策を実施する必要があります。原因は**農薬ラベルの確認ミス**や**周囲からの農薬飛散（ドリフト）**、**散布器具の洗浄不足**などが挙げられます。残留農薬基準値超過事案が発生しないように、改めて生産者への下記5つの内容の指導、J Aでのチェック体制の強化をお願いいたします。

- (1) 農薬使用時の農薬ラベル（登録内容）の確認の徹底
- (2) 生産履歴の記帳、確認
- (3) 残留農薬検査の検体収去方法（出荷前検査）の確認
- (4) 農薬散布時のドリフト対策
- (5) 防除器具使用後のタンク・ホース内の十分な洗浄

2. 農薬散布記録簿チェック項目

事故を未然に防ぎ、事故が起きてしまった際に迅速に原因を究明するためにも農薬散布記録簿を「正しく記入する」ことが重要です。以下のチェック項目を日頃から守り、記入を徹底しましょう。

- 農薬を散布した**日付**を記入しましたか
 - 農薬を散布した**圃場**を記入しましたか
 - 使用した**農薬名**は正しく記入しましたか
- 農薬は剤型（フロアブルや乳剤等）で登録内容が変わります！**
- 使用した農薬の**希釈倍数・使用量**を記入しましたか
 - 使用した農薬の**使用回数・本成分を含む農薬の総使用回数**は合っていますか



混合剤（2成分以上が入っている農薬）は特に注意が必要です！

- 使用した農薬の**使用時期**は合っていますか
- 使用した**すべての農薬**を記入しましたか

3. 農薬散布記録簿の必要性

- (1) 出荷前に未然に事故を防ぐことができる
- (2) 事故やトラブルが発生した際、原因の所在を明らかにすることで迅速な対応ができ、被害を最小限に抑えることができる
- (3) 記録されていることで、実需者・消費者に対して安全・安心を証明することができる
- (4) 毎年、防除が適正であったかを振り返ることができる
- (5) 保管することで、過去の記録を遡ることができる（3年程度は保管しましょう）